コラム

立命館大学客員教授・エコ・テクノロジー研究センター長
TAKEDA Nobuo
武田 信生



プロフィール
京都大学教授、廃棄物学会会長などを歴任
現在、京都大学名誉教授、中央環境審議会臨時委員
NPO法人資源リサイクルシステムセンター理事長

廃棄物―環境―資源

新興国の経済発展や技術革新が新たな資源需要を生み出し、資源の確保が大へん重要なことになってきているようです。隣国の中国は資源確保のための外交を活発化しているようですし、たとえば、ハイブリッド車や電気自動車などへの転換のためには、レアメタルの確保が至上命題であるとされています。

このような状況の中で、新たな資源“源”を求めることもだいじなことなのでしょうが、今ある資源を大切に、何度も何度も使うことはもっとだいじなことだと思います。「循環資源」の考え方であります。金属のようなものは使っても使っても、滅することはありません。有機物質のように加工や消費の過程で、別のものに、別の分子になってしまうものもありますが、これとて自然界の中で再度分解・合成されて、いずれまた、資源として使われるようになっていきます。化石燃料の場合には、そのサイクルというか過程というか、が長すぎて利用速度と合わないところに問題があります。普通のバイオ原料はヒトの利用速度に合致しています。というよりは、ヒトは再生速度に合った利用リズムに慣れてきました。

「廃棄物学会」は2008年12月に「一般社団法人 廃棄物資源循環学会」として再スタートしました。学会名に関する議論の中で、「廃棄物・資源循環学会」というふうに「廃棄物」と「資源循環」の間に「・」を入れる案もありましたが、最終的にはこれが入らないかたちになったことを喜んでいます。「・」が入ると、「廃棄物学会」と「資源循環学会」（存在していたとして）が便宜的に合体したような感じを受け、「廃棄物」と「資源循環」が融合して一体となるという強い意志が示されないのではないかと危惧したからです。

廃棄物は、消費される過程で汚された（エントロピーが増大した）物質です。汚れた物質ですから、そのままにしておけば環境を汚染する可能性が高いといえます。それを再び製品として活かしていくためには汚れをとる（エントロピーを下げる）行為が必要です。エントロピーを下げられた物質は立派な資源として利用されていかなければなりません。廃棄物―環境―資源を一体のものとして、一連のものとして考えることが、廃棄物問題の解決、環境の保全、資源の確保にとって重要であることは、いまさらいうまでもないことでしょう。